

関係社会学の諸層

：二つのバージョン (1)

福 士 正 博

I 課題

本稿の目的は、イタリアの社会学者ピエルパオロ・ドナティが言う関係社会学 (relational sociology) と関係主義的社会学 (relationist sociology) の理論的対立構造を明らかにすることにある。ドナティは、「関係社会学対関係主義的社会学：社会科学の新しいパラダイム」と題する論文の中で、次のように述べている。

「私が紹介するのは、「関係的」と言いながら、実際には「フィギュレショナルな」、「相互交流的 (trans-actional)」で、「還元主義的」になっている社会学とは異なる、それとは別の社会の関係理論についてである (以下で説明するように、私はそれを、「関係的」の代わりに、「関係主義的」と呼んでいる)。私は、関係論的方法論 (方法論的關係主義ではなく) を提案することで、方法論的個人主義や方法論的全体主義に反対する立場をとっている」 (Donati 2017, p. 15)。

関係主義的社会学に該当するのは、この引用にも出てくるフィギュレーション理論を提唱するノルベルト・エリアス、関係社会学に最も適合した関係概念としてトランズアクション (相互交流) を強調するムスタファ・エミルベイヤー、そして彼らの議論を継承したクリストファー・パウエルやフランコイス・デベルトーといった研究者を指している。その他に、ニック・クロスリー、オスモ・キヴィネンやテロ・ピロイネンなどの社会学者も挙げる事ができる。ドナティは、彼らの研究を横目で睨みながら、それとは異なる関係社会学の道を歩もうとしていた。関係社会学はこのように、それ自体論争課題となっている。ドナティと異なる立場に立つムスタファ・エミルベイヤーの言葉を借りるならば、関係社会学が論争課題であるのは、「関係」が「闘いの言葉」 (fighting words) となっているからである (Emirbayer 2013)。エミルベイヤーは、関係社会学が興隆するようになってから、両者の融合を図る動きが生まれていることを強く警戒し、この言葉を、社会学者の反感を買うことを覚悟しながら、あえて意図的に使っている。デベルトーが言うように、この論争が、「新しい瓶に詰められた古いワインにすぎないのであれば、騒々しいだけで、何か新しいものが生まれ

るということにはならなくなる」(Depelteau 2018, p. 3)。本稿が関係社会学の研究状況をドナティにしたがって区分しているのは、二つの関係社会学のうち、批判的实在論に依拠したドナティの関係社会学を支持しているからである。その意味で、本稿の課題を、「批判的实在論から見た関係社会学とはどのようなものか」というように設定し直すこともできる。この課題の中心にあるのは、関係社会学と関係主義的社会学の違いが何に根ざしたものなのかを明らかにすることである。この作業から、新しい瓶に詰められた新しいワインを飲むことができるようになるだろうか。

本論に入る前に、ドナティが関係社会学にどのような拡がり可能性を期待していたのかを確認しておくことにしよう。以下は、ドナティ『関係社会学 社会科学のための新パラダイム』(2011年)の序文の一節である。ここには、彼が関係社会学によって何を問題にしようとしていたのかが率直に示されている。

「本書はこうした世界に新しい光をあてることを目指して執筆された。新しいものを見るには、それに相応しい枠組を必要とする。管見では、社会学はこれまで、それを適切に探究することができなかつたし、それに相応しい手段を開発することもできなかつた。この研究で私は、それを認識し、概念化し、取り扱う新しい方法を提案する。私が提起するのは、批判的实在論という社会的存在論に依拠した、社会学のための「関係パラダイム」である。そうした枠組の中で、私が提案するのは、どのような社会関係であってもその編制体を分析する方法について、「関係的事実」(デュルケムが主張しているような「物」としてではなく)としての社会現象を記述、理解、説明することを目指した、複雑な環境の中にある主観的要素と客観的要素との相互関係である。管見では、社会が関係を主催するのではない、社会は関係が発生する時空間ではなく、関係そのものである。この枠組が、私に、関係善、関係差異、関係理性などの新しい概念について精査させている。実際問題、関係社会学は、社会科学の中で共通に開発され、採用されてきた全ての概念を再定義し、新しいものを追加しようとしている。それは、関係社会学と密接につながっている批判的实在論の観点からアーチャーが開発してきた形態生成アプローチとの結びつきにおいて機能している。総じて、私が試みるのは、「関係秩序」(the order of relations)と呼ぶ一種独特の实在の存在(a *sui generis* reality)を明らかにするということにある。この表現は、社会学者が「相互作用の秩序」(the order of interaction)として認識しているものと似通っているように見える、しかし、それは別ものである。前者は後者に先行し、それを凌駕したものである」(ゴチは引用者。Donati 2011, pp. xv-xvi)。

この引用文の核心は、「関係秩序」という一種独特の实在概念にある。ドナティは、この概念に、「関係パラダイム」という社会学のパラダイム転換が表現されているという。この

議論の特徴は、「関係秩序」を、ある実在と別の実在とのたんなるつながりとしてではなく、それ自体を実在としてとらえようとする視座にある。関係を、テーブルやペンや樹木などと同様に、たとえ目に見えないものであっても、ひとつの実在としてつかまえること、ここに批判的実在論を基礎に関係社会学を組み立てようとするドナティの真骨頂がある。ドナティがここで「総じて」と述べているのは、この概念に、関係善、関係差異、関係理性など、関係社会学に関わる諸概念が集約されていると考えているからである。デュルケムが言う社会的事実になぞらえ、社会関係を「関係的事実」としてとらえているのも、そしてまた、社会とは関係そのものであるというのも、秩序という人々の共通理解によって関係が裏づけられているという確信に支えられている。この点についてドナティは次のように述べている。

「社会関係がそれ自身の実在を持っているということは、そのことによって、どちらかの側に立たなければならぬというのではなく、またシステム理論や行為理論と区別するだけでなく、とりわけ我々が、社会関係の中で、社会が社会問題の起源と人間的解決に向けた探求の中で建設され、改革されるサブ階層を構成している実在を見ることを可能にしている」(*ibid.*, p. 122)。

ドナティは、「社会関係は自らの実在を持っている」というように、社会関係を実在としてつかまえることによって、創発的可能性の道を開き、アーチャーを中心にした形態安定／形態生成論へつなげようとした。この点で、ドナティの関係社会学は、「関係とは何か」という課題と、アフターモダンを展望した「社会変革とは何か」という二つの課題に応える二段構えになっている。前者は後者につながっているという意味で、論理的に先行する説明の筋道でもある。

このようなドナティの関心には、モダニティ（近代）の論理と対峙すること、すなわち、モダニティの後のアフターモダン（ポストモダンではない！）の道を探るという意識が強く流れている。ドナティによれば、モダニティは、人間諸個人と社会関係を対峙させ、それを続けようとしてきた。物質と観念、主体と客体、主観と客観、社会構造とエイジェンシーなどの二項対立は、近代が求める機能的要件から生まれている。関係社会学に求められているのは、近代のこの構造から脱け出すことである。ドナティは、この課題に、「関係社会学が目指すのは、全ての人間が関係的に一人の人間として構成されているという事実を明らかにすることである」(*ibid.*, p. xvi) というように、アフターモダンの時代の人間像と関連づけることで接近しようとした。人間は誰でも、個人的側面と集団的（社会的）側面を併せ持ちながら生きている。このことは、人間は、「私が何者なのかは私が何に関心を持っているのかということである」という人格的アイデンティティと、「私たちが何者なのかは私たちが何に関心を持っているのかということである」という集団的アイデンティティを併せ持って

いるということでもある。ドナティがここで、人格的アイデンティティと集団的アイデンティティとのつながりを、関係社会学の問題として取り上げようとしている。人間は、いつの時代においても、社会=内=存在である。人は誰でも、恋愛中、兵役中、子育て中というように、社会に内属しながら、他者と関係することで生きている。ドナティはこのような人間の姿を、「諸個人は社会の中にどのように埋め込まれているのか」という関係性の問題（主我と客我、或いは自己と他者）として探ろうとしていた。ドナティが関係主義的社会学を批判するのは、人間関係を相互に依存し合う関係にとどめ、モダニティの構造から脱け出す展望を失っているからである。

II 関係論的転回とその先にあるもの

1990年代頃から社会学にこれまでにはなかった新しい動きが見られるようになった。「関係論的転回」(relational turn)と、それを受けた関係社会学の興隆である。この動きは、社会学に、都市社会学、環境社会学、農村社会学、教育社会学、家族社会学などの他に、もうひとつの領域が社会学にあらたに加わったということの意味するだけではなかった。それは、社会関係を社会学の基本的分析単位とする「パラダイム転換」と言ってもよいものを含んでおり、解釈学的転回、言語論的転回、実践論的転回などを上回る、社会学の性格を根本的に変える「メガ転回」とでも言うべき性格を持っていた。この転回が行われるようになった背景には、それまでの社会学（とりあえずここでは便宜的に古典的社会学と一括して呼ぶことにする）の行き詰まりを打開する動きが社会学内部から醸成されていたことである。それは、それまでも指摘されてきたように、方法論的個人主義と集合的個人主義という二つの方法論が持つ限界を克服しなければ新しい社会学の展望が切り開かれないという、多くの社会学者が内に秘めていた危機感の高まりであった。社会学が社会を分析対象としているかぎり、社会関係を分析の中心に据えてきたことは言うまでもない。しかし、それは、社会関係が共通項となっているというだけの表面的な認識にすぎず、社会関係は、個人のプロジェクトであると考ええるウェーバー主義的社会学や、社会関係は社会構造やシステムによって条件づけられた産物であると考ええるマルクスやデュルケム社会学のように、そのような認識の限界を自覚し、そこから脱け出そうとする意識にまでつながっていたわけではなかった。ほとんどの社会学者は、社会関係を自己の行為の結果と考えるか、自己を侵害する外的制約物としてしか考えられず、そこに安住することで、結果的に自らの殻の中に閉じこもってしまっていた。古典的社会学では、社会関係を起点に社会を分析しようとする発想はこの程度のものでしかなかったのである。ドナティが言うように、「我々の世界の「社会的関係性」を実体的に構成しているものは無視され、無効化されることで、バイアスのかかった形のまま、潜在的で、隠蔽され、暗黙状態にとどまった状態」となっていた (Donati 2011, p.1)。社会関

第 1 表 アイデンティティの意味論におけるアイデンティティの位置

古典的意味	近代的意味	アフターモダンの意味
一元論	二元論	関係論
$A=A$	$A=\text{non (non=A)}$	$A=r (A, \text{non-A})$

(出所) Pierpaolo Donati (2011), p. 71.

係の世界は、「人間が生み出したにもかかわらず、目では見えない世界」である。見えないものだから、見ようとしなかったと言ってもよいかもしれない。関係論的転回は、見ようとしなければ、見えないままになってしまうことについて自覚を促した転回である。見えない世界を可視化し、社会関係を分析基軸とする関係社会学を確立することは、社会学がどうしても通過しなければならない道であった。関係論的転回はその道を探る契機であると同時に、次の方向性を示す指針となるものでもあった。

それでは、関係論的転回は関係社会学の成立にどのような影響を与えたのだろうか。社会学の発展における関係論的転回の意義、とりわけ関係社会学の興隆に果たす関係論的転回の意義を理解するうえで参考になるのは、ドナティがまとめた古典的意味論、近代的意味論、アフターモダンの意味論の区分にもとづいた、それぞれの段階の象徴コードの理解である(第 1 表参照)。

古典的意味の象徴コードでは、「アイデンティティは自分自身を除いて関係する必要のない実体」として、一元的に理解されている。したがって、それは、 $A=A$ という形式をとる。近代の象徴コードでは、「アイデンティティを獲得する過程は否定 (negation) を通じて概念化される」(Depelteau 2011, p. 69) というように、二元論的構成をとっている。したがって、 A は、 A ではないすべてのものの否定として、 $[A=\text{ではない (non-A)}]$ という形式をとる。すなわち、 A は A でないものを特定し、 A ではないという否定を通じて A を定義するという、迂回した、間接的な形式をとっている。それに対して、アフターモダンの象徴コードは、 A と A 以外のものの関係性の中で自らを定義する $[A=r (A, \text{non-A})]$ という形式をとる。これが、ドナティの言う「関係自体を見る象徴コード」にあたる。関係概念が登場するのはここにおいてである。関係概念の登場はこのように、近代の意味論からアフターモダンの意味論への転換においてである。 A は、 A と A でないものとの関係という媒介を経ることで定義され、関係の中に埋め込まれている。言い換えれば、関係の中になければ自らを定義することができない。古典の意味論はもちろん、近代の意味論においても、他者の存在は想定されてはいても、「関係のなかの自己」という想定はなく、それが初めて登場するのはアフターモダンの段階においてである。

関係社会学が関係論的転回を経て登場してきたのは、自らのアイデンティティを、自己との直接的関係や、他者との間接的関係(弁証法的関係)ではなく、関係の中で、そして関係

によって定義する段階に社会学が到達するようになったからである。関係性の中で自己を定義することは、我々が日常生活で経験しているごく当たり前のことにすぎない。親は子供との関係において親となる、大家は店子との関係において大家となる。上司は部下がいなければ上司とは言えない……という例は、人間関係のほぼすべてにあてはまる。関係論的転回の意義はこのように、他者との関係的存在を通じて自らを関係づける構成的関係 (constitutive relationship) の視座を確立したことにある。

エストニアの行政学者ベーター・セルグは、関係論的転回が持つ構成的関係の意義をわかりやすく説明している。近代の意味論では、「AのBに対する関係は常にBのAに対する関係であり、逆は逆」という関係にある (Selg and Ventsel 2020, p.18)。第1表でこの関係は、 $[A=\text{non} (\text{non}=A)]$ と説明されている。しかし、アフターモダンの意味論では、「AはBとの関係のゆえにのみAなのであり、BはAとの関係のゆえにのみBなのである」という関係に変化する。第1表でこの関係は、 $[A=r (A, \text{non}-A)]$ と説明されている。AとBは最初から関係の中にあり、BがなければAはない (逆は逆) ことになる。AとBは常に相互依存関係にあり、その関係から離れることはできない。セルグが挙げる例では、ハンマーと釘は、それぞれ形、大きさ、重さ、時空間上の位置を持つ異なる実体であるが、「AはBとの関係があるが故にのみAなのである」というように、ハンマーは釘との関係が初めてハンマーとなる。権力を行使する者も、権力的支配を受ける者がいて初めて権力者となる。テレンス・ボールが言うように、「『もの』として我々が見ているものは、個人化された対象物ではなく、抽象的に言えば、一面的に見られる関係であるという意味で、世界は、具体的で、個人的な『もの』からではなく、『関係』から構成されている」 (Ball 1978, p.104)。このように、ハンマーも、権力者も、「関係のアンサンブルの中の構成的要素である」ことから、ハンマーとなり、権力者となる。関係論的転回の意義は、関係とは構成的関係であることを明らかにしたことで、社会現象を分析するにあたって、「初めに関係ありき」という視点を関係社会学の出発点に据えたことにある。関係社会学も関係主義的社会学も、形式的には、関係論的転回のこの意義を共有している (ただし、後に述べるように、あくまで形式的にであって、実質的には異なる立場に立っている)。

しかし、狭義の関係論的転回が果たしたのはここまでである。関係論的転回の理解が進むことによって、関係社会学も関係主義的社会学も、関係とは構成的関係であるという共通の理解に形式的な意味で到達することができるようになった。どちらもこの共通理解を基礎に成立している。しかし、関係社会学が論争課題になっているのは、この共通理解の先で対立しているからである。関係社会学と関係主義的社会学に分岐したのも、関係論的転回を共通に理解したその先にある。ここで大事なことは、「関係は構成的関係である」というセルグの指摘が、彼の主張の一部でしかないことである。その意味で、セルグも、この対立のうちの一方の側に立っていたことになる。残りの部分とは、「関係するということは、構成する

ということであって、原因となるということではない」というように、「関係は因果的關係ではない」という後半の部分である。したがって、問題は、セルグのこの主張の前半部分と後半部分の理解にかかっている。ひとつの理解は、「関係は構成的関係でもあり、因果的關係でもある」というように、両者が両立するという主張である。もうひとつの理解は、「関係は構成的関係であり、因果的關係ではない」というように、両者の両立が不可能であるという主張である。後者がセルグの主張にあたり、関係主義的社会学はこの主張を踏襲している。他方、前者の主張を踏襲しているのがドナティをはじめとする批判的实在論に依拠した関係社会学である。セルグは、ハンマーと釘との関係を精査することで、このような主張の違いが生まれる理由を探ろうとしていた。二つの主張をもう少し見てみよう。

① 「関係は構成的関係でもあり、因果的關係でもある」

「偶有的な因果的關係は一方の運動と他方のその結果である運動の間で想定されるものである。両者のあいだに因果的關係が存在していることは、「観察」と「経験」によって確立されている。ハンマーと釘の出会い、釘の運動と「普段から連結」(constantly conjoined) していることである」(Selg and Ventsel 2020, p. 19, イタリックは引用者)。

セルグは、この引用文の内容について、「具体的実体を、第一義的に、或いは、それらの関係から独立している存在として見るという考え方である。すなわち、「因果的關係」として見ている」と説明している(イタリックは引用者)。大事なことは、実体を関係から離れて独立して存在していることである。この説明が関係社会学につながっているということは、関係社会学が実体と実体との関係を因果的に見ていることになる。

② 「関係は構成的関係であり、因果的關係ではない」

「ハンマーは、それが一定の利用や機能、すなわち、釘を打つことによって、ハンマーとなる。何がハンマーかは関係論的に定義されている。物理的対象とか身体としてのハンマーは存在すらしない。それがハンマーとして使用されなければ、そして使用されるまで、すなわち、人間(大工)による人間的利用(釘を打つ)がなければ、ハンマーではない。ハンマーは、大きさ、形、重さ、或いは他の物理的特徴の点からばかりでなく、関係のアンサンブルの中で構成的要素であるという点でハンマーとなる」(ibid., pp. 19-20, イタリックは引用者)。

セルグは、この引用文の内容について、「ここで我々が取り上げているのは、実体とか因果的關係ではなく、構成的関係であることに注意しておかなければならない。実体は関係の中で構成されており、後者は実体に寄生したものであるとか、二義的なものではなく、何よ

りも、それがなければ実体もないというものである」と説明している (*ibid.*, p. 20)。この説明が関係主義的社会学につながっているということは、関係主義的社会学が実体の前に関係があるということ、その意味で構成的なものであり、それが認められなければ、「実体もない」と認識する社会学であるということである。ハンマーには、大きさも、形も、重さもある。しかし、それらの実体的特徴がただちにハンマーにしているわけではない。ハンマーは釘との関係があってはじめてハンマーとなる。

先に指摘したように、関係社会学も、関係主義的社会学も、関係が構成的関係であることを形式的に認めていることからすれば、両者の違いは、実体と実体との関係を因果的關係も含めて理解することができるか否かにかかっている。両者の違いを明確にする上で、セルゲが依拠しているのは、以下のウェントの議論である。

「因果的關係において、先行条件 X は効果 Y を生み出す。このことは、X が時間的に先行し、Y とは独立して存在していることを前提としている。構成的関係では、X は Y との関係においてそれが何かということである。X は Y を前提としており、そのようなものとして時間的断絶というものはない。それらの関係は偶有的というより必然である」(Wendt 1999, p. 25)。

ウェントにしたがうならば、ここで述べられていることは、以下の三つの仮定にまとめることができる。因果的關係をめぐる対立は、この三つの仮定をどのように理解するのかということにかかっている。

- ① X と Y はお互いに独立して存在している
- ② X は Y に時間的に先行している
- ③ X がなければ、Y は起こらない

ウェントの指摘によれば、X と Y が因果的關係にあるためには、①と②の二つの条件が必要となる。ウェントは、X が Y の原因であることを述べている仮定③について、因果的關係論者であっても、両者の関係が必ずしも必然ではないことに不安を持っているという説明を加えており、その意味で両者の違いは微妙である。構成的関係論者にとって認められないのは、因果的關係論者が主張する①と②の条件である。両者の違いで最も大事なものは、二つのなかでも、①の仮定である。②の仮定は、①の仮定が成立した後につながる要件であるから、両者の違いは、①の仮定の理解の違いから生まれているとよい。

それでは、①の仮定は何を語っているのだろうか。この仮定は、实在論からすれば、X と Y が独立して存在しているという、当たり前のことを述べているにすぎない。しかし、

「独立して存在する」とは、X と Y が関係を結んでいないということである。①の仮定は、X と Y が対峙する最初の時点で関係性を想定していないことになる。その意味で、「初めに関係ありき」を主張する構成的関係論からすれば、①の仮定はこの主張を否定していることになる。因果的關係論者が「関係とは構成的関係である」ことを認めるのは、①の仮定を認めた上で、X と Y がつながる次の段階に発展していくからである。因果的關係論が「社会的なるものは本質的に关系的である。社会的な事実は、「初めに関係ありき」という前提によって理解、説明することができる」と言う場合、最初の段階からそれを前提としている場合であるか、次の段階に到達している場合のいずれかである。「関係社会学も関係主義的社会学も、関係とは構成的関係であるという共通の理解がある」という関係論的転回の意義は、因果的關係論と構成的関係論では、このような存在論と認識論の違いがある。

先のウェントの引用にもあるように、構成的関係論者にとって X と Y が構成的関係であるには、両者の関係においてそれぞれが「何であるか」(=どのような位置関係にあるか)が必然的な重要性を持っており、②の仮定にあるような時間軸の観察を必ず必要としているわけではない。②は、①の仮定を認めた上で、構成的関係に発展する次の段階で成立する仮定であるから、①の仮定と同様に、構成的関係論者が認めることのできない仮定となる。ここでは、②の仮定が成立した場合、先のドナティの引用にもあるような、アーチャーを中心とした形態安定論／形態生成論へつながっていくことに注意しておきたい。構成的関係論者が認めることのできないのは、①の仮定もさることながら、②の時間軸に関する議論である。

このウェントの説明から、セルグは、「関係論的考えとは、実体間の関係が因果的ではなく、構成的であることを想定する以上のものではないと主張することで、我々は、関係主義に対する議論の中で、ある種のメタ理論的立場をとることになる」(Selg and Ventsel 2020, p.22)という結論を導き出している。セルグのこの結論は、「関係とは構成的関係である」という共通の理解を再確認したという意味で正しい。しかしここで問題となっているのは、この結論から因果的關係の議論にまで発展する可能性がないのかどうかである。したがって、これだけでは、「関係は構成的関係であり、因果的關係ではない」と結論することはできないことになる。ドナティが言うように、「実体(自然、構造)と関係(関係性)は、社会的実体の共原理である」ことを因果的關係論も主張しているからである。

このように、関係社会学と関係主義的社会学が対立している背景には、関係概念をめぐる因果的關係論(批判的实在論)と構成的関係論の鋭い対立がある。この課題を解決する方法はおそらく二つしかない。ひとつは、統一した関係概念を確立すること、もうひとつは、関係概念をめぐる論争点を明らかにし、それぞれの論点について合理的な説明をしている立場を支持することである。セルグやウェントの議論からも分かるように、前者の方法をとることは事実上不可能である。二つの方法は、説明手続きに違いがあるだけで、最終的に同じ結論に収斂していくというものではない。後に述べるように、関係社会学が論争課題となって

いる背景にはプラグマティズムと（批判的）实在論という思想対立が根底にあるだけに、むやみに論争を繰り返しただけでは、一方的な主張に終わるだけで、最後に統一した理解に近づくことができるというようなものではない。そのことからすると、二つの思想的対立のうちどの立場に立つのかをあらかじめ明らかにしておくことが現実的で、有益なやり方となる。本稿が支持するのは、ドナティやアーチャーが主張する批判的实在論的關係社会学である。

関係社会学をめぐる思想的対立を探るにあたって、最初に留意しておくべきことは、存在論、認識論、そして方法論のすべてについて、両者の対立点を明らかにすることである。先の①の仮説のように、因果的關係論と構成的關係論の対立がXとYを独立した实在と認めるかどうかということから生まれていることを考えるならば、アーチャーが述べているように、「社会的实在性とは、なにかを知るだけでなく、どのようにして社会的实在性の説明を開始するかを知る必要があるのである。要するに、方法論を広く説明プログラムと解すれば、方法論とは社会的存在論と実践理論との必然的な連結環のことなのである」（アーチャー 2007, 7頁）ことをしっかりおさえ、存在論を認識論や方法論にまで広げていくことが必要となる。それでは、因果的關係論と構成的關係論は、具体的に、どのような点で対立しているのだろうか。

Ⅲ 関係社会学をめぐる思想的対立（1）：批判的实在論

前節の説明から明らかになったのは、因果的關係論と構成的關係論がいずれも関係が構成的關係であることを理解しつつ、その先に因果的關係を認めるかどうかをめぐる対立していたことである。ただし、後に述べるように、因果的關係論と構成的關係論も、関係が構成的關係であることを共通に理解しているという場合でも、構成的關係を実体間のインターアクション（相互作用）と考える因果的關係論と、トランズアクション（相互交流）と考える構成的關係論の違いがあることに留意するならば、共通項があるという理解自体、成立しないかもしれない。とくに、両者の違いから、インターアクションにもとづいた関係社会学を共-決定主義として強く批判するデペルトーの「ディープ関係社会学」の立場からすると、こうした共通理解があること自体、間違いということになる（Depelteau 2008, 2013）。

それでは、因果的關係論が構成的關係を前提にしているにもかかわらず、その前提の先に因果的關係を導き出す構造があることを構成的關係論が認めることができない理由はどこにあるのだろうか。それは、繰り返し述べたように、因果的關係論が批判的实在論に、構成的關係論がプラグマティズムに依拠している思想上の対立のために、相互に歩み寄ることができない存在論が介在しているからである。プラグマティズムが承認することができない根底にあるのが批判的实在論の理論構造である。

まず確認しておかなければならないのは、関係社会学と関係主義的社会学の対立を、因果

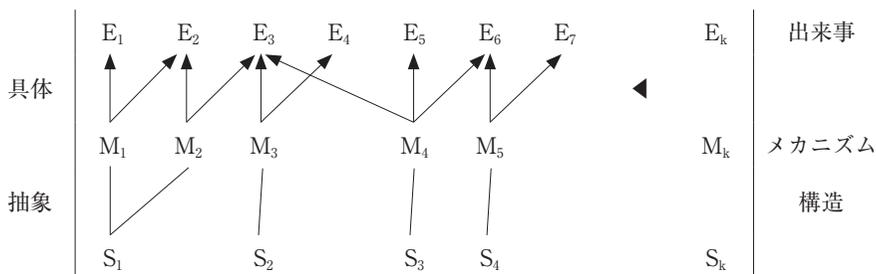
的關係と構成的關係の対立という狭い構図で議論することの無理についてである。批判的實在論の立場に立つアンドリュー・セイヤーは、『社会科学の方法 實在論的アプローチ』の中で、この構図の狭さについて次のように述べている。

「實在論的見方では、因果性とはバラバラな出来事間の關係（「原因と結果」）に関するものではなく、対象ないし關係の「因果力（causal power）」あるいは「傾向（liabilities）」に関するものであり、より一般的に言えばそれらの活動様式または「メカニズム（mechanisms）」に関するものである」（セイヤー 2019, 101 頁）。

セイヤーがここで主張しているのは、実体間の因果性に関する議論が、因果力（causal power）や傾向（tendency）、更に生成メカニズム（generative mechanism）に関する議論にまでつながらなければ、「あるものの原因を問うことは、何が「それを生じさせている」のか、何がそれを「生み出し」、「生成し」、「作り出し」、「決定している」のかを問うこと」（同）にまでつながっていかないことについてである。このように、關係を因果的に理解するには、更にその先にある広いパースペクティブの下で、因果力、傾向、生成メカニズムといった、批判的實在論の諸概念を分析することが必要となる。これらの諸概念を問題にしなければならないのは、実体間に因果的關係があっても、その關係を妨げる条件が存在しているならば、必ず「X が Y を引き起こす」ということにならない傾向性（偶有性）が常につきまとっていることを視野に入れなければならないからである（上記③の仮定にかかわる偶有的条件）。一見すると必然的關係があるように見えても、「X が Y を引き起こさないこともある」という偶有的關係が常に潜んでいる。そうであるならば、關係の因果的理解に求められているのは、「ある対象の本性とその対象がもつ因果的な力や傾向性との間に、内的な必然的關係が存在している」というメカニズムを確認することである。批判的實在論が因果的關係の先に求めているのは、X と Y との間に、因果的な力が生まれているという必然的關係である。セイヤーは、対象の本性を構造と呼び、そこで働いている機能をメカニズムと呼んでいる。ここで言う必然的關係とはこの生成メカニズムの存在を指している。セイヤーは、構造、メカニズム、事象との關係を三層構造にまとめている（第 1 図参照）。

批判的實在論が、因果力や傾向、メカニズムといった諸概念を核心に据えるのは、我々が住む社会的世界を考察するには、実験室といった人為的世界を作り、法則的規則性を検証しようとする自然科学と違って、社会科学の場合、アブダクションやリトロダクションといった推論仮説を駆使しなければ、實在の領域に接近することができないからである。因果力や傾向、メカニズムといった諸概念は、このような批判的實在論に特有な推論形式のための分析道具である。バスカーが明らかにしたように、経験の領域、現実の領域、實在の領域のうち、経験的事実、事象、メカニズムのすべてにわたって考察することができるのは實在の領域だけである（第 2 表）。この領域に接近するには、この領域を動かしているメカニズムの解剖が必要となる。實在は、直接観察者が知覚基準を適用することのできないメカニズムを

第1図 構造, メカニズム, 出来事



(出所) アンドリュウ・セイヤー『社会科学の方法 実在論的アプローチ』(佐藤春吉監訳), ナカニシヤ出版, 2019, 112頁

第2表 実在的世界の三領域

	実在の領域	現実の領域	経験の領域
メカニズム	○		
事象	○	○	
経験的事実	○	○	○

(出所) バスカー (2009), 3頁

もっているだけに、これに接近することのできる推論形式を必要としていた。

それでは、解剖する鍵はどこにあるのだろうか。このような批判的実在論の理解からすれば、構成的関係論が関係を構成的関係にとどめ、因果的關係を否定するのは、因果力や傾向、メカニズムに関する議論を否定する理由がその理論構造に組み込まれているからである。ドナティはこの鍵について次のように指摘している。

「私のアプローチは、ひとことで言うと「関係論的実在主義」という、分析的、批判的、関係的と名づけた一種の実在主義にもとづいたものである。そこで意図しているのは、構築主義的（フラットな）存在論にもとづいた関係的アプローチに対する代替案を提起することである」(Donati 2017, p. 17, ゴチは引用者)。

ここには、因果力や傾向性、メカニズムを考察する上で、最も重要な鍵が指摘されている。すなわち、XとYの関係を、たんに差異化されている(differentiated)だけの水平的な(flat)な関係と見る構成的関係論に対して、両者の関係を階層的關係(stratificated relationship)と見る因果的關係論や批判的実在論との立場の違いである。ダナーマークはこの違いについて、「世界は単に差異化され構造化されているだけでなく、階層化されているものである。メカニズムは順次実在の異なった層や階層に属するのであり、したがってそれら

の階層は位階的に組織されている」(ダナーマーク 2015 年, 94 頁) と述べている。ひとつの鍵はこのように、X と Y を階層的で、位階的な関係と見ることにある。ここで注意しておかなければならないのは、第 1 図にあるように、構造も、メカニズムも、出来事も、それぞれの次元で、複数の(多数の)要素が複雑に交差していることである。このことは、構造のある要素とメカニズムのある要素、そして出来事のある要素に、1 対 1 の関係でつながっているわけではなく、別の要素の影響も受けていること、そのために、因果的關係ととっても、常に要素間に必然的關係があるわけではなく、そこには偶有性が常に潜んでいることを意味している。それは、それぞれの次元の各要素が独自の回路で創発性に組み込まれているからである。このことを考えるならば、因果的關係の理解を深める上で大事な第 1 図も、それぞれの次元のそれぞれの要素の創発段階の違いを加味するならば、このような簡便な描き方はできないことになる。プラグマティズムは、この理解が欠如しているために、構成的關係論の理解も平板になっている。

關係を階層的に見ることから、もうひとつの鍵が生まれる。それは、実在的關係から階層的關係を生み出す創発的力(emergent power)、すなわち、「X がなければ、Y は起こらない」という因果的力が内在していることについてである。構成的關係は階層的關係を否定しているから、創発的力も否定することになる。『批判的実在論辞典』によれば、創発性は次のように定義される。

「(創発性は) 次の三つの特徴から哲学的に定義される。(1) ある実体, 特性, 或いはシステム β は, その存在を, 他の実体, 特性, システム a に依存している, (2) その依存性には, a における基本的變化が β における基本的變化を意味する共-変数形式が含まれている, (3) β の形態, 機能, 結果は a に還元することができない。こうして, (1), (2) は不変的ではないつながり, 或いは不規則で, そして/或いは, 多様な実現可能な原因として概念化することはできる。ただし, (3) は, その關係形式を問題としなければならないことを意味している。何故なら, β は a だけからでは翻訳, 説明, 予測できない, a と β が分離形態であることが含意されているからである」(Hartwig (ed.) 2007, pp. 166-167)。

創発的力についてよく引き合いに出されるのが、水素と酸素(X と X', 上の説明では a) という二つの要素が結合して水(Y, 同じく β) が生まれるという例である。階層的關係とは、水素と酸素の結合レベルと水が生まれるレベルとは異なる次元にあるということである。創発的力とは、二つの要素の結合から、まったく性格が異なる物質が創発的に生まれる因果的力のことである。「私たちが火を消すという水の力を持ち出して説明したりはしない。というのも、酸素と水素はとてつもなく可燃性のもだからである」(セイヤー訳 115 頁)。セイヤーのこの指摘で大事なことは、創発的力と同時に、水の特徴を分析するには、水素や酸素

を分析することですませようとする還元主義もまた無意味だということにある。何故なら、両者はすでに異なる次元にあるからである。アーチャーは、「創発的諸性質は関係的なものである。その性質は、連結から生じる。……この因果的力は、この連結の構成諸要素の力には因果的に還元不可能である。それは、階層化されているという社会的実在の本性を示している。そこでは、相異なる階層は異なる創発的性質と力を有している」（アーチャー 2007, 11 頁）と述べている。

ただし、ここで述べられている、「相異なる階層は異なる創発的性質と力を有している」という指摘にしたがうならば、因果的関係論と構成的関係論はいずれも関係が構成的関係であることを共通の理解としているというこれまでの指摘は不正確ということになる。注意しなければならないのは、すでに述べたように、この理解はあくまで形式的なものにすぎず、「構造とエイジェンシーは相互に構成し合っているのだが、それぞれそのレベルに特有の創発的性質を有しているので、互いに構成的なものとみなされることはない」（傍点引用者、アーチャー同、191 頁）ことに注意しておかなければならない。

因果的力を創発的力の発揮メカニズムとして理解する立場からすると、仮定①と②を仮定③へとつなげることで、実在論を時間軸の中に埋め込むという次の議論が生まれてくることになる。アーチャーはこの点について、「中心的に議論すべきは、構造とエイジェンシーは、時間経過における両者の相互作用を検証することによってのみ結合できるということ、そして時間を適正に組み込むことなしに構造とエイジェンシーの問題は決して十分に解決できないということである」（アーチャー同、93 頁）と述べている。しかも、アーチャーが同時に、ここで指摘されている時間軸は、「所与の「構造」と「エイジェンツ」は時間次元を異にする別々の回路をもち作用しているので、それらは相互に区別できるということである」と指摘しているように、二つの要素がたんに同じ場面で同時的に結びついているのではなく、別々の回路を持っているからこそ、異なる次元の時間軸があることである。Y を生み出す X の諸要素 ($X_1, X_2, X_3 \dots X_k$) は、それぞれ異なる存在としてそれぞれの回路を持っている。その意味で、それぞれの要素はすべて分離された独自の存在である。先の仮定①, ②, ③は、そのようなものとして、時間の経過の中に埋め込まれた存在論を意味している。

アーチャーの分析的二元論が画期的なのは、この議論を、形態安定／形態生成論としてまとめ、構成的関係論と因果的関係論を架橋していることである。形態安定／形態生成論は次の 4 つの命題をひとつのサイクルにまとめたものである（アーチャー同、240 頁）。

- (i) 社会構造 (SS) の内部および相互間には内的で必然的關係が存在する
- (ii) 因果的影響力は、社会 (諸) 構造によって社会的相互行為 (SI) に対して及ぼされる
- (iii) 社会的相互行為のレベルでは、諸集団と諸個人の間因果的關係が存在する

(iv) 社会的相互行為は、現在の内的で必然的な構造的関係を変更し、新しい関係を導入することによって、社会構造の組み立てをエラボレートする。ここでは、形態生成が関連する。あるいは、社会的相互行為は、実在する内的で必然的な構造的関係を再生産する。このときは、形態安定論が適用される

(i) ~ (iv) は、形態安定／形態生成論の、社会的条件づけ—相互作用—社会的エラボレーションという三つの段階に分かれた過程を四つの命題に分けて描いたものである。すべての過程に因果的關係が含まれているが、構成的關係論との間で形式的に共通しているのは、(ii) と (iii) の部分である。後に述べるように、構成的關係論やプラグマティズムには社会構造という概念がないために、(i) の社会的条件づけも、(iv) の社会的エラボレーションの過程も、この議論に登場することはない。

構成的關係論が、関係を構成的關係にとどめ、その先を展望することができないのは、実在の階層性と創発力という二つの鍵に接近することができずにいるからである。X と Y の関係を差異化したフラットな關係としてしか見ないプラグマティズムからすれば、そこから創発の力が発揮されるということも当然認めることはできない。構成的關係と因果的關係の違いは最後はここに由来する。何故なのだろうか。この点を探るために、本稿の課題と関わるかぎり、プラグマティズムの理論構造を探ってみることにしよう。言うまでもなく、プラグマティズムといっても、多様な論者がおり、それぞれに違いがあることから、一括して論じること自体そもそも無理である。ここでは、そのことを了解した上で、プラグマティストの中でも、關係主義的社会学がひとつのうねりとなって社会学を席卷するようになった契機がエミルベイヤールの「關係社会学宣言」の発表であったことから、彼が主に依拠していたジョン・デューイのプラグマティズムを中心に見てみることにしたい。

IV 關係社会学をめぐる思想的対立 (2)：プラグマティズム

すでに見たように、因果的關係論と構成的關係論の違いは、X と Y との関係を階層的關係と見るのか、水平的 (フラットな) 關係と見るのかの違いから生まれている。因果的關係論は、X と Y との関係を階層的關係と見ることで、そこから創発の力を導き出し、形態安定形態／生成論につなげることで、モダニティを批判するメカニズムをつかもうとしていた。批判的实在論のこうした理論構造が、ドナティをはじめとする關係社会学につながっている。ドナティが、エミルベイヤール、エリアス、クロスリー、デベルトーなどを關係主義的と批判するのは、構成的關係論が X と Y との関係を水平的關係としてしか見ることができないために、批判的实在論が主張するメカニズムの解剖という課題に接近できず、自らを制約してしまっているからである。そのことからすると、構成的關係論が水平的關係を主張する理由、

とりわけその主張にこだわる思想的理由を探ることが何よりも重要となる。

プラグマティズムには、批判的实在論と違って、因果的關係という意味での社会的メカニズムにあたる概念はない。あるのは、投入—産出のつながりを、アクター (A) —問題状況 (P) —習慣的行為 (H) —対応 (R) の過程の中で見ようとする視点である。ニール・グロスは、プラグマティストが考える社会的メカニズムを、「問題状況に直面し、習慣的対応を動員するアクターのつながり、或いは集合」と定義している (Gross 2009, p. 268)。しかし、この定義は、あくまで投入—産出の構成的關係を描いているだけで、因果力や創発性を含んだ社会的メカニズムと呼ぶことができるようなものではない。その一方、この定義の中に、プラグマティズムが主張する構成的關係の特徴がはっきり描かれている。それは、ある問題群 (P) に直面した人間主体 (A) が、問題解決に向けて対応 (R) するために、これまでの経験から学んだ習慣的行為 (H) を行うという一連の過程である。プラグマティズムにとって大事なのはこの過程におけるつながり (chain) であって、それぞれの過程を構成する要素群がどのようにつながり、依存し合う關係が作られているかが重視されている。

ここで注意しなければならないのは、プラグマティズムの中から、この過程をはみ出す動きが關係論的転回を経て生まれてきたことである。この動きの意味を探る上で手がかりとなるのは、エミル・ベイヤールが「關係社会学宣言」で強調したトランズアクションという、プラグマティズムに見られる習慣をはみ出した特有の概念である。この概念の意義を強調する上でエミル・ベイヤールが依拠したのが、デューイが晩年にベントレーとともに発表した『知ることと知られること』(1949年)であった。このことからすると、彼らがこの研究の中で展開している主張を探ってみることが、この課題に接近する上で格好の素材となる。エミル・ビスノプスキによれば、「実践のプラグマティスト的哲学理論の基礎として役立つ三つの概念がある。すなわち、経験、習慣、そしてトランズアクションである」(Visnovski 2019, p. 40)。これら三つの実践概念の中でも、デペルテューが「プラグマティスト的な実践哲学を支持する最近の、おそらく最も展望のある選択肢は、トランズアクション概念である」(Depelteau 2015) と述べているように、経験、習慣、トランズアクションを人間行為の進化の過程としてとらえた上で、トランズアクション概念が最も重要視される段階に到達していることを指摘している。ビスノプスキによれば、その理由は、「それが有機体—環境の相互作用の文脈においてばかりでなく、人間の社会的相互作用の文脈においても機能しており、社会的実践について考える場合、相互作用主義を含んでいると同時に、更にその先へ行っている」(Visnovski 2019, p. 42) からである。プラグマティズムは、生活世界をこのように、人間と自然との關係と人間と人間との關係という二つの側面の交差点としてトランズアクションを概念化しようとしていた。ここには、進化論の影響を受けたプラグマティズムが、有機体 (人間) と自然との環境適用ばかりでなく、人間と人間との社会的相互作用を含むことで、伝統的な關係概念を上げようとする姿勢を見てとることができる。ビスノプスキは、

第 3 表 デューイとベントレーの関係概念

セルフアクション (self-action)	ものごとが彼ら自身の権力の下で作用しているものと見なされている
インターアクション (inter-action)	ものごとは因果的相互つながりの中でのものと均衡を保っている
トランズアクション (trans-action)	記述及び名称化システムが、諸要素、他の推定しうる分離可能な、或いは独立した「実体」、 「本質」 、或いは「リアリティ」に最終的に帰属させることなく、また、そうした分離可能な「諸要素」から推定しうる分離可能な「関係」を孤立させることなく、作用の諸側面や諸段階を扱うために採用されている

(出所) John Dewey and Arthur Bentley, *Knowing and the Known*, 1949, pp. 132-133.

「トランズアクションは、存在しているすべてのものが、自分自身との関係であると同時に、社会的主体と彼らの環境との相互交流の網における役割という点で、それが何であるかを説明するアプローチである」(ibid., p. 42) ことを指摘している。

デューイとベントレーによれば、関係概念には三つの形式がある。第 3 表は、三つの関係概念を説明している。

注目すべきは、ここで行われているトランズアクションの説明が、批判的实在論の重要な要素を否定することで行われていることである。「～に帰属させることなく」、「～を孤立させることなく」という説明は、関係を構成する諸要素がそれぞれ独立した実体として存在していることを前提に組み立てられた批判的实在論を否定する形式をとって行われている。更に重要なのは、この否定が、「ものごとは因果的相互つながりの中でのものと均衡を保っている」というインターアクション(相互作用)の否定でもあることである。この点をとくに強調しているのは、構成的関係論の中でも、キビネンとピイロイネンの一連の研究である。デペルトーによれば、彼らは、「社会構造とエイジェンシーとの分析的区別を必要としているものの、明確な形にせよ、不明確な形にせよ、両者の存在論的分離を必要としない」と論じることで、批判的实在論やその二元論に対するプラグマティスト的批判を提示した」(Depelteau 2015, p. 4) という。この点は、後に説明するように、関係社会学の関係概念がインターアクションを基礎に成立していることを考えるならば、因果的関係論と構成的関係論の関係を考える上でも決定的に重要な論点である。

しかし、この説明だけでは、トランズアクションの定義が直接行われていないだけに、中途半端なものにしかっていない。それにもかかわらず、デューイやベントレーがこうした説明形式をとるのは、X と Y が、最初から関係の中に埋め込まれた相互依存関係の中にあることを強調するねらいがあるからである。X と Y がそれぞれ独立した実体としてあることは、その存在があらかじめ決められた実体として存在していることである。トランズアク

ション概念を説明する上でまず必要だったのは、これらの要素をあらかじめ決められた存在としてではなく、関係の中に埋め込まれていることを強調することによって、「それらが何であるのか」、「何をしているのか」が決まるプロセスを明らかにすることであった。トランズアクション概念が求めているのは、「Aの行為がBの行為と切り離されることができない相互依存性にもとづいた社会的領域」の存在だからである。

ここで、あらためて注意しておかなければならないのは、「初めに関係ありき」という構成的関係の意味である。因果的關係論も、構成的關係論も、XとYが差異化された構成的關係にあることを共通に理解しているといっても、それは形式的な意味にすぎず、そこには実質的な違いというものが含まれている。その違いを理解することがなければ、プラグマティズムと批判的實在論の対立構造の本質をつかむことはできない。ここで、先の引用文でドナティが、「私のアプローチは、……構築主義的（フラットな）存在論にもとづいた關係的アプローチに対する代替案を提起することである」（本論文110頁引用文）と述べていたことを思い出しておこう。ドナティがここで意図しているのは、關係を階層的關係と理解する批判的實在論と、それを水平的（フラット）な關係と理解しているプラグマティズムとの違いを明確にすることである。この違いを探るために最初に必要となるのは、両者を共通の土俵にのせることである。両者が共通の土台にのっていなければ、これまで指摘してきたことがらについても再考しなければならなくなる。共通の土俵とはどのようなものだろうか。

因果的關係論のこれまでの説明では、「XがなければYは生まれない」という因果的關係は、両者が創発的關係にあることを根拠に、異なる次元にあることが想定されていた。しかし、因果的力や創発性を認めることのできないプラグマティズムからすれば、XとYとの關係を最初から異なる次元にあるものと想定することはできない。プラグマティズムにとって本来組上にのぼらなければならないのは、異なる次元のXとY（との關係）ではなく、仮にXがYを導き出すとしても、その前に、 $X_1, X_2, X_3 \dots X_k$ という同じ次元にある各要素のつながりである。批判的實在論が主張する創発性は、少なくとも形式的にはこの土俵で行われる議論を踏まえ、その後続く議論において登場するものである。

プラグマティズムは、 $X_1, X_2, X_3 \dots X_k$ の關係が水平的關係にあるという理解に立っている。水平的存在論とは、「そこにある全てのものが一般的種類の現象に対して、ひとつの實在レベルの上で存在しているという考え方」（Schatzki 2016）を指している。「初めに關係ありき」という構成的關係が成立するためには、關係要素に位相の違いがある垂直的關係を想定することなど最初から無理である。求められているのは、すべての要素が相互依存關係にあること、そして、それぞれがどれひとつとして欠かすことのできない要素であることを明らかにすることである。そのために求められていたのが、要素間の水平的關係であった。この要件は、とくにプラグマティズムの経験や行為（実践）理論に強く反映されている。この点について、「關係社会学パラダイム」を書いたアレクサンダー・マンテリーズは、「トラ

ンズアクションは、たんなるインターアクション、結合 (association)、異なる実体に属する諸要素の結合様式ではなく、人間の相互共依存性の形成にともなう、「生きた」関係、或いは関係の絡み合いといったものである。このことを理解する上で、実体は「水平的」な状態にある。諸個人の相互共依存性は、経験を通じて達成される性質であり、人間活動の紐帯を生み出す「生きた」結合組織の形成である」と述べている (Manterys 2017, p.75)。このように、各要素をつなぐのが、人間が行う行為 (実践)、そして経験という概念である。その意味で、プラグマティズムの関係理論は行為理論 (実践理論) と密接な関係にある。社会的実践理論家セオドル・シャツキしがうならば、「実践理論では、社会的変化の異なるダイナミックスを表象する社会的なるもののレベルというものには存在しない。水平的存在論は、社会的なるものの機能やメカニズムを取り上げる場合、社会的現実には階層性がないという受け止め方をしている」(ibid.) と述べている。

それでは、因果の関係論と構成的関係論の違いを明らかにするために、プラグマティズムと批判的实在論が同じ土俵に立つことが求められると仮定した場合、批判的实在論は、関係を構成する諸要素が水平的関係にあるという理解にまで歩み寄ることができるだろうか。それは無理である。何故なら、プラグマティズムの議論には、時間軸に関する先の仮定②を欠いているために、相互依存関係に埋め込まれた要素は、ある時点を輪切りにした関係性の中で浮かび上がってくるものでしかなく、条件づけられた要素という想定がそもそもないからである。時間軸に関する仮定②が欠けていれば、原因にあたる X を構成する要素 $X_1, X_2, X_3 \dots X_k$ の、条件づけられている段階の違いが意識されず、構成的関係といっても、たんに依存し合う水平的つながりがあるだけで、その先にあるものが展望されないことになる。仮定②を議論の俎上にのせることがどちらの陣営も譲れない論点なのであれば、共通の土俵もないことになる。デューイが言う「トランズアクションは、他のものの中にあつて、かつ他のものとともにあるものとして、分離されえない観察—つまり世界史のなかの現代において、観察者、観察されるものにかかわっている観察—として理解されるべきである」(Dewey and Bentley 1949, p.104) というだけでは、各要素がそれぞれ別々の回路を経て独自の因果的力を持って土俵に上がっているという現実が浮かび上がってこない。 $X_1, X_2, X_3 \dots X_k$ すべてが、それぞれの階層的位置を持っていることから出発しなければ、構成的関係の理解は薄っぺらなものになってしまうだけである。この点については、別の節であらためて詳しく論じることしよう。

参 考 文 献

- Archer, Elizabeth (2010), Critical Realism and Relational Sociology, *Journal of Critical Realism*, 9 (2), 199–207.
 Ball, Terence (1978), Two Concepts of Coercion, *Theory and Society*, 5 (1), pp. 97–112.

- Crossley, Nick (2011), *Towards Relational Sociology*, Routledge.
- Depelteau, Francois (2008), Relational Thinking: A Critique of Co-Deterministic Theories of Structure and Agency, *Sociological Theory*, 26 (1), pp. 51-73.
- Do (2013), What Is the Direction of the “Relational Turn”, in Christopher and Depelteau, Francois (ed.), *Conceptualizing Relational Sociology*, Palgrave.
- Do (2015), Relational sociology, pragmatism, transactions and social fields, *International Review of Sociology*, pp. 1-20.
- Do (2018), From the Concept of ‘Trans-Action’ to a Process-Relational Sociology, in Depelteau, Francois (ed.) (2018), *The Palgrave Handbook of Relational Sociology*, Palgrave.
- Dewey, John and Bentorey, (1949) Arthur, *Knowing and the Known*, Hassel Street Press.
- Donati, Pierpaolo (2011), *Relational Sociology, A new paradigm for the social sciences*, Routledge.
- Do (2015), Manifesto for a critical realist relational sociology, *International Review of Sociology*, 25 (1), pp. 86-109.
- Do (2017), Relational versus Relationalist Sociology; A New Paradigm in the Social Science, Stanreczy [State Affairs], 1 (12), PP. 15-65.
- Do (2018), An Original Relational Sociology Grounded in Critical Realism, in Depelteau, Francois (ed.) (2018), *The Palgrave Handbook of relational Sociology*, Palgrave.
- Do (2021), *Transcending Modernity with Relational Thinking*, Routledge.
- Donati, Pierpaolo and Archer, Margaret (2015), *The Relational Subject*, Cambridge UP.
- Elder-Vass, Dave (2007), For Emergence: Refining Archer’s Account of Social Structure, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 37 (1), pp. 25-44.
- Do (2022), *The Causal Power of Social Structures*, Cambridge UP, 2010.
- Do (2022), Pragmatism, critical realism and the study of value, *Journal of Critical Realism*, 21 (3), pp. 261-287.
- Emirbayer, Mustafa (1997), Manifesto for a Relational Sociology, *American Journal of Sociology*, 103 (2), pp. 281-317.
- Do (2013), Relational Sociology as Fighting Words, Powell, in Christopher and Depelteau, Francois (ed.), *Conceptualizing Relational Sociology*, Palgrave.
- Garrison, Jim (2001), An Introduction to Dewey’s Theory of Functional “Trans-Action”: An Alternative Paradigm for Activity Theory, *Mind, Culture and Activity*, 8 (4), pp. 275-296.
- Groff, Ruth (2016), Causal mechanisms and the Philosophy of Causation, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 47 (3), 286-305.
- Gross, Neil (2009), A Pragmatist Theory of Social Mechanism, *American Sociological Review*, 74 (3), pp. 358-379.
- Do (2018), Pragmatism and the study of large-scale social phenomena, *Theoretical Sociology*, 47, pp. 87-111.
- Hartwig, Mervyn (ed.) (2007), *dictionary of critical realism*, Routledge.
- Hedstrom, Peter and Ylikoski, Petri (2010), Causal Mechanisms in the Social Science, *Annual Review of Sociology*, 36, pp. 49-67.
- Kivinen, Osmo and Piironen, Tero (2006a), Toward Pragmatist Methodological Relationalism

- From Philosophizing Sociology to Sociologizing Philosophy, *Philosophy of the Social Sciences*, 36 (3), pp. 1-27.
- Do. (2006b). On the limits of a realist conception of knowledge: a pragmatist critique of Archerian realism, *The Sociological Review*, pp. 20-21.
- Do. (2007). Sociologizing metaphysics and mind: A pragmatist point of view on the methodology of the social sciences, *Human Studies*, 30, pp. 97-114.
- Do (2018). Pragmatist Methodological Relationalism in Sociological Understanding of Evolving Human Culture, Depelteau, Francois (ed.), *The Palgrave Handbook of Relational Sociology*, pp. 119-141.
- Do (2004). The Relevance of Ontological Commitments in Social Sciences: Realist and Pragmatist Viewpoints, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 34 (3), pp. 20-21.
- Liang, Lily and Lin Sida (2018). Beyond the Manifesto: Mustafa Emirbayer and Relational Sociology, in Depelteau, Francois (ed.), *The Palgrave Handbook of relational Sociology*, Palgrave.
- Manterys, Alexander (2017). Relational Sociology paradigm, *Stanrzezy [Stated Affairs]*, 1 (12), pp. 67-94.
- Mingers, John and Standing Craig (2017). Why things happen-Developing the critical realist view of causal mechanisms, *Information and Orgnaization*, 27 (3), pp. 171-189.
- Porpora, Douglas (2015), *Reconstucting Sociology The Critical Realist Approach*, Cambridge UP.
- Powell, Christopher and Depelteau, Francois (2013), *Conceptualizing Relational Sociology*, Palgrave.
- Prandini, Ricardo (2015). Relational Sociology: a well-defined sociological paradigm or a challenging 'relational turn' in sociology ?. *International Review of Sociology*, 25 (1), pp. 1-14.
- Ritz, Bridge (2023). Social Mechanisms: bridging critical realist and pragmatist approaches, *Journal of Critical Realism*, 22 (3), pp. 404-410.
- Sawyer, Keith (2005), *Social Emergence Societies As Complex Systems*, Cambridge UP, 2005.
- Schatzki, Theodre (2016). Practice Theory as Flat Ontology, inSchatzki, Theodore (ed), *Practice Theory and Research*, Routledge.
- Selg, Peter (2020). Causation is not everything: on constitution and trans-actional view of social science methodology, pp. 1-14.
- Do (2018). Power and Relational Sociology, in Depelteau, Francois (ed) (2018), *The Palgrave Handbook of relational Sociology*, Palgrave.
- Selg, Peter and Ventstel (2020). The "Relational Turn" in the Social Science, *Introducing Relational Political Analysis*, Palgrave.
- Do (2016). 'The fable of Bs': between substantialism and deep relational thinking about power, *Journal of Political Power*, 9 (2), pp. 183-205.
- Vanderstraeten, Raf (2002). Dewey's Transactional Constructivism, *Journal of Philosophy of Education*, 36 (2), pp. 233-246.
- Visnovski, Emil (2019). Action, Practice, and Theory: Toward a Pragmatist Practice Philosophy, in Buch, Anders and Schatzki, Theodore (ed.) (2019), *Question of Practice in Philosophy and Social Theory*, Routledge.

関係社会学の諸層

Wendt, A. (1999), *Social theory of international politics*, Cambridge UP.

アーチャー, エリザベス『实在論的社会理論』(佐藤春吉監訳), 青木書店, 2007年

エリアス, ノルベルト『社会学とは何か』(徳安彰訳), 法政大学出版局, 1994年

上林良一『ベントリーの政治社会学』法律文化社, 1999年

桜井洋『社会秩序の起源 「なる: ことの論理」』新曜社, 2017年

セイヤー, アンドリュー『社会科学の方法 实在論的アプローチ』(佐藤春吉監訳), ナカニシヤ出版, 2019年

ダナーマーク, バース他『社会を説明する 批判的实在論による社会科学論』(佐藤春吉監訳), ナカニシヤ出版, 2015年

バスカー, ロイ『科学と实在論 超越的实在論と経験主義批判』(式部信訳), 法政大学出版局, 2009年

バーンスタイン, リチャード『哲学のプラグマティズム的転回』(廣瀬寛・佐藤駿訳), 岩波書店, 2017年

福士正博『「社会的質」の可能性を探る』日本経済評論社, 2023年

ローソン, トニー『経済学と实在』(八木紀一郎・江頭進・葛城政明訳), 日本評論社, 2003年